

資質アップ研修会のこと

酒井 董美^{ただよし}

タイトルは鳥取県民話サークル連合会が行った年に一度の研究会の名称である。この連合会に所属するサークルは四つあり、東から「さじ民話会」(15名)、「とっとり・民話を語る会」(7名)。「倉吉民話の会」(6名)、「ほうき民話の会」(16名)である。役員会は一年に三回程度行っており、年間活動や交流会などを取り決めているが、今回はその一環の研修会であり、会場は鳥取県中部の倉吉体育文化会館であった。参加者は21名(さじ4名、とっとり5名、倉吉6名、ほうき6名)だった。

朝11時に始まった会は、終わったのが午後4時であり、情報交換では、けっこう充実した内容だったのが印象に残った。主な内容を挙げておく。

まず、二代目会長だった小林龍雄氏(昭和9年生・87歳)が、昨年11月28日に鳥取県教育委員会表象を受けたのを祝い、大きな花束の贈呈があったが、会員の喜びの気持ちを込めたこのセレモニーを筆者は、とても嬉しく思った。

それから研究会に移ったが、最初はさじ民話会の前会長・岡村絹江氏による「佐治谷話の指導報告」として、平成24年に88歳で逝去された佐治谷話語り部の谷上一行氏(大正14年生)の穏やかに語り込んだ「鮎のすし」を録音したCDを聴き、その人柄の説明を受けた。次に山本輝美氏が準備されたプリントに添って、鳥取市の無形民俗文化財である「佐治谷話」の要点を解説して研修は終わったが、筆者としては佐治谷話の保存活動で、重要な役割を果たした元佐治村長だった上田禮之氏(昭和55年現役で逝去)が、佐治谷話と並んで三大愚か村話だった南山話の福島県、栗山話の栃木県にも足を運び、両地では話を隠そうとする傾向が強いが、これこそ村興しのキーポイントにすべきだと上田氏は考え、文化協会の中島嘉吉氏(大正9年生・平成31年に逝去)に佐治谷話の収集を命じ、出来たのが、昭和48年の『さじだにばなし』(佐治村文化協会刊)なので、このお二人の業績を無視してはならないことを後で補足しておいた。

昼食後、各サークルの語りの披露があった。順に項目だけ挙げておく。

とっとり・民話を語る会(奥田美喜子「豊乗寺の蛇の池、木下伸子「前世の因縁」)、ほうき民話の会(横山寿美恵「年齢の話」、内田美恵「明蓮法師のお経」、倉吉民話の会(河野美千子「東郷池に舞い降りた天女」、伊佐田品子「山寺の小僧さん」、友森智恵子「師走の大工」)、さじ民話会(光浪信雄「豆腐屋にやった娘」、西尾正道「蟹のふんどし」)。以上である。

その後情報交換に移り、各サークルの活動の報告、コロナ禍での対応のありかた、新入会員の獲得のしかたなどが話題になったが、出席した新入会員の体験談もあり、なかなか盛り上がっていた。

筆者としては、いずも民話の会の小学生自身の語り指導の実際を紹介したり、14日にオンラインで行った奈良の民話を語りつくぐ会と島根県内の二グループ、いずも民話の会(出雲市大社町)、とんと昔のお話会(松江市出雲かんべの里)との様子について話し、多くのサークルでもパソコンの導入を行うべきであると強調しておいた。次回以降、鳥取県でも交流会に参加する願いがあるからである。(元島根大学法文学部教授)